
キューピッド様こんにちは!/沖神

いとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キューピッド様こんにちは！／沖神

【Nコード】

N2818X

【作者名】

ひとり

【あらすじ】

暇潰しでしていた“キューピッド様”、…けど、とんでもない事が起こってしまいましたっ！！

1話（前書き）

うわあ…

初めての方は初めまして

前から知っている方はお久しぶりです、

いとりです

かれこれ投稿しないで1年以上経ちました

しかもまだ話終わってないし…すみません

今回はちょっと自分の暇潰しで投稿しました

文章も話も酷いです

それでも宜しい方はどうぞ、暇潰しとして読んでいただけると幸いです

では…

1話

ある晴れた日の昼下がり、万事屋の3人は机を囲み、ある一点を見つめていた

机の上には大きなハートと文字が書かれた紙

その紙の上に3人が鉛筆を一緒に持ち、呪文を唱えていた

「…な、なあ、やっぱり止めねーか？」

そう言ったのは銀時だった

顔が少しだけ青くなっているのが分かる

「いくら暇だからって、こんな事やらなくても…。」

「今更何言ってるんですか、銀さん。それにもう呪文唱えたから来てますよ、キューピッド様。」

「なッ…!?! 何処! 何処に!?!」

そう言った新八は至って冷静で、怖がっている銀時を見て呆れてるようだ

この日、万事屋に仕事が1つも来なく、暇で仕方ない3人は暇潰しをする為に、キューピッド様をしていたのだった

「来てるなら早速聞いてみるネ! じゃあ新八の好きな人教えるアル!」

「ええッ！？僕！？」

そう質問した神楽の言葉に corres するように、3人が持っていた鉛筆が文字の上を滑り始めた

それに合わせて部屋に響く銀時の叫び声

「ちよ…！誰が動かしてるだろ、絶対！」

「僕は動かしてませんよ。」

「私もアルよ。」

半泣きの銀時を無視して、鉛筆は文字の上を滑って行く

神楽が示された文字を1つ1つ声に出して読む

「お」「つ」「う」

その3文字を指して鉛筆は動かなくなった

「…いや、予想はしてたよ、うん。」

「期待を裏切らない男アルな、新八。」

そう言う銀時と神楽に、新八は少し切れ気味に声を出した

「何ですか！お通ちゃんの何処が悪いですか！！あれ程可愛くて……」

「あーあー分かった分かった。」

と、2人が新八の言葉を遮る

「人の話を最後まで聞けえええ！」

そう叫んだ新八だったが、最早聞く耳を持つ者は1人も居なかった

「じゃあ、次は銀ちゃんの好きな人教えるネ！」

「えー…俺居ないんだけど…。」

そう言った銀時だったが、鉛筆は動き、1つ目の文字を指していた

『か』

それを見て新八と神楽が目丸くした

「銀ちゃん、もしかして私アルか…!？」

「えっ！銀さん、そうだったんですか？」

2人がそう言っている間に、鉛筆が次々と文字を指して行った

『ん』『み』

「……………甘味？」

新八が繋げた文字を読む

「人じゃねーじゃねえかあああ！！！」

切れている神楽を見て、銀時が笑いながら言った

「まあ、いいじゃねえか、本当の事なんだし。…じゃあ次は神楽だな。」

「…え！？別にいいアル！やらなくていいネ！」

拒否する神楽を無視して、銀時が質問した

「キューピッド様、神楽の好きな人は誰ですかー？」

どうやら、銀時はからかうのに夢中で、もう怖い事を忘れているようだ

「ちよっ……」

「神楽ちゃん、鉛筆離したらキューピッド様帰ってくれなくなるよ？」

「…ッ！」

ニヤニヤしながら、今にも飛び掛かりそうな神楽を見る銀時と新八

そして、銀時が鉛筆が示した文字を読もうとした時だった

「えーと、最初が……」

「……いいって言ってんだろおおおッ!!」

叫び声と一緒に机が飛ぶ

その勢いで銀時と新八が横に転がった

どうやら神楽が我慢できなくなり、机ごと紙を吹き飛ばしたようだった

天井からヒラヒラと紙が舞い落ちる

「ちょっと、神楽ちゃん!どうするの!?!キューピッド様帰ってくれなくなっちゃうよ!?!」

「おい、新八！キューピッド様帰ってくれなかったらどうなんだよ！？」

慌てふためく2人を余所に、神楽は1人静まり返っていた

「えーと…僕にも分かりませんが、誰かに取り憑いたりするんじゃないですか？」

「と、取り憑くう！？」

そう聞いて真っ青になった銀時が、今まで静かにしていた神楽の肩を掴み、激しく揺らした

「バ、バカヤロウ！お前何て事……」

途中まで言って、銀時が言うの止めた

「銀さん……？」

不思議に思って新八が2人に近付く

「……う……」

神楽から小さな声が聞こえ、下を向いていた顔が上を向いた

「……………!？」

その顔を見て、銀時と新八は息を呑んだ

「……………痛いですが、銀時さん……」

目の前に、そう言って静かに涙を流している神楽の顔があった

「……………誰!？」

2話

「銀さん……。」

「…ん？」

「…誰でしょう、この子。」

「誰って、神楽ちゃんだよ、神楽ちゃん。」

「いや、違うでしょ。だってこんなに……」

言い合う銀時と新八の目の前には、先程まで泣いていて、今は静かに床に座っている神楽がいた

「こんなに静かじゃないでしょ、神楽ちゃん。」

「……………」

「…やっぱり、取り憑かれたんでしょうかね？」

「……………」

「キューピッド様に。」

先程までやっていたキューピッド様を強制終了してからというもの、神楽の様子が可笑しい

急に物静かになり、今まで親しみ込め呼んでいた2人の名前には、余所余所しく“さん”が付けられた

また、あれ程口が悪かったのに、今は銀時達に向かって敬語で話し掛ける

しかも標準語で…

「そうしか考えられませんよ。神楽ちゃんがふざけてこんな事するなんて考えられないし…。」

「マジでか…。」

そう言って頭を抱えた銀時に、ふと声が掛けられた。

「あの…、お話し中にすみません。」

「うおっ!!」

驚き、声がした方を見ると、近くに神楽が立っていた。

「銀時さん、夕飯は何かいいですか？」

「へ……?」

急な質問に咄然とする銀時

「…た、卵掛けご飯じゃないの？」

彼女が炊事を担当するといつも卵掛けご飯しか作らないので、銀時はそう彼女に聞き返した。

「卵掛けご飯なんて料理じゃないじゃないですか…。」

「…自分で言ってるよ、この子

茫然としている2人を余所に彼女が

「私、食材買いに行ってきますね。帰ってくるまで何が食べたいか決めてて下さい。」

そう言って、玄関から出ていった

「……………」

「新八君…。」

「…はい、何ですか？」

「怖いくらいに神楽ちゃんが優しい……………」

「ええ、そうですね…。」

「…………。」

2人共黙って、部屋にはただ時計の針の音だけが響いていた

暫く経って、銀時がいきなりソファから立ち上がった

「新八、神楽の身体からキューピッド様をどうにかして離さなきゃなんねえ。」

「ハイ。」

「けど……」

銀時が遠くを見ながら静かに言った

「もう少し、このままでもいいよね……?」

新八が無言で頷いた

どうやら、2人はキューピッド様憑きの神楽にすっかり魅入られたようだ

「神楽、早く帰って来ねえかな…」

3話

―…だるい…。

騒がしい街並みを歩きながら、沖田はそう思った

今日もいつもと変わらない、“見回り”という仕事に飽き飽きして
いたのだった

事件が起こるなら未だしも、今日の江戸はとても穏やかで賑わい溢
れている

何か事件でも起こればいいのに、と思うのは仕事柄良くない事だろ
うが、そう思ってしまうくらい暇なのである

―…あ…。

そんな事を考えながら、ふと顔を上げた時だった

前方に、人混みに混じって見覚えのある日傘が見える

―…あいつか…。

顔を見なくても、誰なのか分かった

鉢合わせすれば、直ぐに顔を顰め、罵声を飛ばしてくる凶暴な奴…

―…まあ、いいや。

暇潰しが出来るなら、相手が彼女でもいいと沖田はそう思った

2人の距離が段々と短くなる

彼女は辺りをキョロキョロと見回していた

そして、彼女の蒼い大きな瞳と目が合った

……………？

目が合った瞬間、彼女は直ぐに視線を逸らした

少し違和感を抱いたが、いつも通りに話し掛ける

「おい、チャ……」

ここまで言い掛けると、わざとその声を掻き消すかのように、彼女が声を出した

「……こんにちは。」

そう一言口にして、彼女は自分の隣をすりりとすり抜けた

「……………は？」

―…
“ こんにちは ” ？

挨拶なんて、彼女から今までされた事なんてない

ましてや、自分の姿を見て突っ掛かって来ないなんて尚更可笑しい

「オイ、ちょっと待て。」

少し離れた所にいた彼女を追い掛け、細い腕を掴んだ

「……………!」

「一体何企んでやがんだ、テメエ。」

腕を掴んだ瞬間、彼女は自分の顔を見たが、また直ぐに下を向いた

彼女は何も答えず、ただ聞こえるのは周りの街並みの賑やかな音だ

けだった

「オイ…。」

そう話し掛けた時、ふと彼女が口を開いた

「は…、放して下さい、沖田さん…。」

！……は…！？

そう言った彼女の頬は、林檎のように真っ赤だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2818x/>

キューピッド様こんにちは!/沖神

2011年10月24日17時09分発行